

巣舞る通信 夏の特別号



第14号 2009年8月

神様のパレットにはどのくらい多くの絵の具が用意されているのだろうか？

「鮮やかな彩り」＝「感動バイブレーション」!!

・リプチの森の横には太田川がゆったりと流れている。

南蛮山や山古志から降った雨の一滴が、他の水を集めながら小川となり、日本一の長い信濃川に注ぎ込む。太田川自身はそれ程長くない川でもある。決して清流等とは呼べないのだが、ここに溪流の宝石と言われるカワセミが巣くっている。朝の散歩の楽しみの一つは、太田川でカワセミに会うことである。姿が見えない日はいつしか名前で呼ぶことにしている。カワセミの「カッシー」である。勿論、何羽いるか私には分からない。町内で野鳥観察委員をやっているFさんが言うには、JRの鉄橋から太田橋までの1km弱の間に7羽観測されているというのである。一緒に七羽が飛んでいなければ、七羽を見分けることができないのではないかと皆同じ姿かたち・色合いをしているから私の稚拙な意見である。それでも私は長い間1羽か2羽としか出会ったことがなかった。きつとそれ以上の複数に出会うことはないだろうと思っていた。ところが、漸く梅雨明け宣言が下された8月4日の朝、何と5羽のカワセミが目の前を飛んでいくではないか！本当にびっくりしてしまった。直列に飛んで行く5羽を同時にカメラに納めることは出来なかったが、かろうじて3羽を撮ることが出来た。今年はとくに梅雨は長く散歩道も重い空気が漂う毎日であったが、カワセミの群れに会った途端に、とても大きな「感動・バイブレーション」を得ることができた。溪流の宝石と言われるだけあって、飛んでいるカワセミの背中では鮮やかな緑とトロピカルブルーをしている。“鮮やかな彩りの群”に出会うことが出来ると思うだけで、これからの散歩が一層楽しくなりそうである。

・秋山孝ポスター美術館長岡が7月12日にオープンした。大正14年築の元銀行の建物である。

築齡は84歳であるが、弊社の技術を駆使してリノベーションされることで、鮮やかな形態が再生された。長岡市の歴史的建造物認定を受けて外装・耐震補強工事をするようになった。とてもいいプロポーションであると同時に元々の色彩の再現工事でもある。御影石の洗い出しと外壁タイル・屋根瓦のリフォームは長年佇んでいた町並みにしっかりと馴染み、艶やかな彩を添えてくれている。展示スペースは間口4間・奥行5間の20坪と小さな美術館である。3段重ねに展示された67の秋山孝作品はどの一つをみても力強い迫力を持っている。更に、一枚一枚がパワーを持ったポスターの重なりは一層鮮やかな色彩力を放っている。入り口のドアを開けた途端に来館者の誰もが“わっ”と発する「感動・バイブレーション」！兎にも角にも凄いパワーを感じる。是非とも来館ください。また美術館ではサポーター会員を募集中です。

・今年も長岡祭りの一大イベントである大花火大会が開催された。

8月2日3日の両日で繰り出した人数は88万人と言う。NHK大河ドラマの直江兼続をテーマとした天地人花火はテーマ曲に乗って打ち上げられたデザイン花火である。プロデュースは昨年を引き続き池端信宏氏〔加山雄三氏長男〕による大変レベルの高い花火であった。また中越地震後の復興メモリーとして継続して打ち上げられたのは、“フェニックス花火”である。昨年は6連だったが、今年は15連打ち上げであり、打ち上げ場所も2.5倍と近くで見ると見る人々には一度に捉えることの出来ないパノラマワイドである。

花火のポイントは「構成・間合い」でデザインされるが、そのベースは「音と色彩」である。音のない花火等迫力なぞ何にもない。音で光る花火が眼に映る。音は聞くものと思っていたが眼に映る花火はまさに「音は観るもの」かもしれないと思えて来た。と同時に花火の形・色彩は見るものだと思っていたが、年を重ねるうちに「色彩は聴くもの」であったのであろうか？とも思えてきた。「感動・バイブレーション」、それはまさに人の五感に総合的・相互的に働いていると言って良いのであろう。

・長く重い梅雨季でも「鮮やかな彩り」は何とも私達の心を豊かにしてくれます。

(株)高田建築事務所

これからは本格的な夏です。

代表取締役

最後になりましたが皆様にありましては益々のご健康とご平安をご祈念申し上げます。

高田 清太郎



Photo/S.T

(株)高田建築事務所

長岡/長岡市撰田屋5-6-22

新潟/新潟市中央区女池南3-5-15